

=====
本メールマガジン[NEE Mail Magazine]は、経済教育ネットワークより会員の
皆様にお送りしております。
=====



◆ NEE Mail Magazine 129号 ◆

-----2019-10-1◆◇

神無月、全国の神様が出雲にでかけて神がいないとされている10月です。
二期制の学校、大学は後期授業(クォーター制だと第三クォーター)が開始
されます。通勤通学の時間帯の電車が混み出す時期でもあります。高校では最後
のセンター試験の受付が始まり、受験準備が本格化します。中学校では、公民
の学習がはじまっていますが、経済はこれからというところでしょうか。
そんな今月もネットワークの活動を報告するとともに、授業に役立つ情報を提
供いたします。

【今月の内容】

【1】最新活動報告

19年9月の活動やニュースを報告します。

【2】定例部会のご案内・情報紹介

部会の案内、関連団体の活動、ネットワークに関連する情報などを紹介します。

【3】授業のヒント「穴埋めプリントを再検討してみよう」

【1】最新活動報告

■新年度(2019年度)の事業計画が了承されました。

経済教育ネットワークの2019年度の事業計画が、9月20日に開催された理事
会、評議員会では了承されました。

これまでの各種経済教室、シンポジウム、部会に加えて、部会内のプロジェクト
として、大学入試新テストの検討、活動型教材活用法、先生のための経済学
入門講座などの新しい企画が予定されています。

各種事業の開催などの案内は、これまで通り本メールマガジンやHPでお知らせ
いたします。

■東京部会(No.111)を開催しました。

日時:2019年9月21日(土) 14時00分~17時00分

場所:慶應義塾大学三田キャンパス研究室棟446会議室

主な内容:参加者14名

(1)「夏休み経済教室」の総括が行われました。

・鈴木深氏(東京証券取引所)から、開催実績概要、アンケート結果の詳細な
資料が提示され、説明と検討がおこなわれました。

- ・実績では、実参加数が 704 名（昨年 747 名）と減少傾向（名古屋会場を差し引いても 7%減）であること、全体の所感では、登壇講師への評価はおおむね好評、授業実践は高評価、講演も高い評価であったことが報告されました。
- ・アンケート結果では、参加者の属性（初めての参加者が約 4 割など）が報告され、各講師への評価・感想も報告されました。
- ・検討では、主に参加者減少とその対応が話し合われ、案内情報の流れを強化すること（教育委員会主催の研修会、研究団体の集会、教科教育関係者への情報提供など）、タイムリーな内容・テーマの設定（参加者により要求が違ってることへの対応など）、リピーターにプッシュする方法を考える事などが提起されました。
- ・なお、今夏の「夏休み経済教室」の記録は下記に掲載されています。ご覧ください。
<http://www.econ-edu.net/announcement/index.html>

(2) 来年度「夏休み経済教室」の方向性の検討と確認を行いました。

- ・来年度は、東京オリンピック・パラリンピック開催という特殊事情のため、東京会場に関しては中学高校それぞれ 1 日として、8 月 17 日からの週に設定することで了解されました。

(3) 参加者からの実践報告と検討が行われました。

① 杉浦光紀先生（都立井草高等学校）から、期末考査で行った試験問題が提示され、その検討が行われました。

- ・試験問題は、新聞記事をリード文として、それを読ませ、知識の確認と政策の影響を問うもので、検討では、新聞をリード文に使うことの吟味、設問にあったマイナス金利のとらえ方の二点が問題となりました。

- ・新聞をリード文に使うことに関しては、読解力を向上させるためには知識確認の設問のための穴はあけない、複数紙の内容を提示して主張の違いを読み取らせるとよいなどの意見が出されました。

- ・マイナス金利に関しては、エコノミストも政治家も見解が一致していないものを教える（問う）ことへの問題点が出され、金利がしっかり分かっていない段階で、その影響を問うのは無理であり、教材とすることは慎重でなければならないという指摘がありました。また、結論が定着していない政策や見解（複数の見解）が並列するとき、生徒に一つの政策を、理由をつけて選ばせることは難しすぎるので、見解ごとの論拠について考えさせる範囲で止めることが肝要という指摘がありました。

② 新井（上智大学非常勤講師）の授業報告がありました。

- ・新井が非常勤で出講している高校で行った授業プリント（どんな社会をのぞむのか）と生徒の反応が紹介されました。

- ・授業で使った社会モデルは、宮尾尊弘先生（筑波大学名誉教授）がかつて「シンプル経済教室」（下記の HP にあり）のなかで示されたもので、生徒は当初

は格差社会を選択するものが多かったが、その結果を踏まえた問題提起をするなかで経済格差を深く考えるようになった様子が紹介されました。

<https://sites.google.com/site/econeduvideo/>

(3) 教材の整理とHP改修の報告がされました。

・これまでのネットワーク部会や各種のイベントで紹介されストックされてきた教材、特に活動型の教材をどのように先生方が活用できるか、整理の仕方、その提示の仕方が話し合わせ、関連して、HPの改修に関する報告がありました。

・協議では、教育学者の意見を聞く、公開時のポイントとして指導案という言葉とキーワードを必ず入れる、現在公開されて現場の先生に使われているHPを参照するなどの提案がされました。

・プロジェクトの進め方など各部会で検討して、動き出すことが了解されました。

部会内容の詳細は以下をご覧ください。

<http://www.econ-edu.net/meeting/tokyo/tokyo111report.pdf>

■大阪部会(No.65)を開催しました。

日時:2019年9月28日(土) 18時00分~20時00分

場所:同志社大学 大阪サテライト

内容はまとまり次第、HPに掲載します。

【 2 】定例部会のご案内・情報紹介

<定例部会のお知らせです。(開催順)>既報

■札幌部会(No.21)を開催します

日時:2019年10月5日(土) 14時30分~17時00分

場所:キャリアバンク セミナールーム

札幌市中央区北5条西5丁目7 Sapporo55ビル5階

■東京部会(No.112)を開催します

日時:2019年10月17日(木) 19:00~21:00

場所:慶應義塾大学三田キャンパス研究室棟 446 会議室

■先生のための経済教室(沖縄)を開催します

日時:2020年1月18日(土)

場所:沖縄県立図書館ビジネスルーム (ゆいレール「旭橋駅」)

沖縄県那覇市泉崎 1-20-1

【 3 】授業のヒント 「穴埋めプリントを見直そう」

今回のヒントは、新井紀子さん(国立情報学研究所)の『AIに負けない子どもを育てる』(東洋経済新報社)から得たものです。

(1) 衝撃的な指摘

この本、新井さんの前著『AI vs.教科書を読めない子どもたち』の続編です。

新井さんがはじめた「リーディングスキルテスト」のサンプルがあり、そこから分ること、テスト結果のタイプ別の課題が分析されています。

それだけでなく、実際に新井さん自身が行った授業の紹介、見学した授業から発見した知見が書かれています。

そこに指摘されていたのが、教科書が読めなくなっている一つの要因として、授業で使うプリントが取り上げられていました。

これまで、プリント授業を行ってきた筆者にとって、ちょっと衝撃的な指摘でした。

(2) 穴埋めプリントの意図せざる結果

新井さんは、小学4年の算数の研究授業を見学、よく練られた良い授業だったのだが、気になることを発見します。

それは児童の使う鉛筆が2Bだったことでした。

小4で2Bの鉛筆を使うというのは、ノートに鉛筆で書く量が減っているというこの反映ではないかと仮説をたて、生徒たちをみてゆくと、黒板を写すスピードが遅い。

参加されていた先生に聞くと、ノートをあまり取らせないという。なかには、「黒板を写させる活動はアクティブラーニングではなく、一方的な教え込みですから」、「黒板を写させる時間もったいない。それならば話し合いの活動に時間を割いた方がいい」という先生もいたと同書では紹介されています。

なぜ、黒板を写すことをやらなくなったか。それを確かめるために全国のワークシートやプリントを集めると、穴埋め形式のものが圧倒的に多かったことを発見します。

つまり、文章を文章として理解するのではなく、用語をキーワードとして覚えてしまえば分かった気になり、テストでも得点がとれてしまう。それが、文章が読めない生徒を作り出す要因ではないかということです。

それが積もり積もって、ノートのとれない中学生、高校生、はては大学生になる。

日本の先生は真面目だから、生徒のために熱心に穴埋めプリントを作る。それが意図せざる結果を生み出しているという指摘です。

(3) 筆者の体験

筆者は、教員なりたてからずっとプリント授業はやってきましたが、穴埋めプリントを作り出したのは、それほど昔ではありません。(プリントづくりは、当初はガリ版刷り、次が謄写ファックス、そして現在へと進化？してきました。)

進学重点校に異動して、予備校関係者から授業診断を受けた(受けさせられた)ことがあり、そのなかで板書が下手との指摘をうけたことがきっかけでした。

ある程度の進度を確保する必要と、もともと板書が苦手でもあったこともあり、それまでの資料の読み取り型を残しつつ、板書事項を入れたプリントを作り、そこに穴をあけはじめたという次第。

生徒から穴に番号をふってほしいという要望もでて、今では典型的な穴埋めプリントになってきています。(板書事項プリントと資料プリントを分けて、前者はカラー紙で印刷するという丁重ぶりです。)

どんなに授業を聞いていない生徒でも、穴の部分の用語を紹介すると、条件反射的にそれを埋める風景はちょっと恐ろしいくらいです。

話は飛びますが、同じ本のなかで、新井さんは、大学時代の阿部謹也先生の「一橋大学生の知的レベルが劇的に下がったと感じたのは、生協にコピー機が導入されたときだ」という言葉を紹介されています。

似たような経験を筆者もしています。

ディベート授業の準備に夏休みの宿題にテーマのリサーチレポートを課していました。

当初は、まだパソコンが普及してなかったこともあり、生徒は図書館に通い、必要部分を写してレポートを作成していました。(今でも、そのなかの優秀な手書きのレポートをもっています)

つまり、生徒たちは力ずくの作業をしていたことになります。

その時のディベートは今振り返っても内容充実のものだったと言えると思います。

それが出来なくなったのは、PCの普及で簡単にレポートができるようになってからです。事前の準備をきちんとしていないディベートは内容がスカスカになります。だから、進学重点校でしたが、ディベート授業の質はそれほど高いものとはなりませんでした。

(4)ではどうするか

新井さんも書いていますが、いきなり昔のスタイルのチョーク・アンド・トークの授業を復活させるのは現実的ではありません。

なにより、一度、自分の授業スタイルを点検してみることから始めるしかないでしょう。

その際に、自分の授業のなかで、これは伝えたいというコアの内容を生徒にどう伝えるか、また、それが伝わるためにはどんな方法がよいか半年かけて再考してみることをすすめます。

生徒が黒板をリアルタイムで写せるようになる、穴埋めプリントを使わなくとも自分のあたまを使って話を聞くことができるようになるためには、新井さん流に言えば、生徒たちの状態を「耕す」必要があるということだろうと思います。

生徒を「耕す」ための仕掛けはなにか、昔ながらの良い授業をしていたと新井さんが評価した小学校の若い先生は、新聞記事の要約と感想を半年かけて継続して、ノートがとれる子どもたちを育てたと紹介されています。

それぞれ先生方は、生徒たちと格闘しながらつくりあげた「耕す」方法のノウハウをお持ちのはずです。それを共有しながら、論理的に考える生徒、読解力がある生徒づくりをすすめたものだ、その場にネットワークがなればよいと、自身の反省を込めて考えています。

さあ、まずは自分の穴埋めプリントの修正版をつくらなければ。(新井)

【 4 】編集後記(みみずのたはこと)

これまで部会やイベントの記録係を結構やってきました。それが講演や講義内容の復習になっていたことをあらためて確認。

手間暇がかかったけれど、認知症対策にもすこしはなったかな。(新井)

=====
登録に心当たりのない方、今後配信を希望されない方は下記会員ページよりお手続き下さい。

<http://www.econ-edu.net/aboutus/contact.html>



編集・発行 : 経済教育ネットワーク

----- (C) Network for Economic Education ◆◇